

永眠者記念礼拝は、この生田教会に連なつたすべての故人を覚える記念式です。わたしたちに先んじて神のもとに逝かれた方々を記念して、この礼拝に集められました。ここで、わたしたちは、身近なひとりの親族または複数の親族を、あるいは教会においてつながつた方々を思い起こしています。その方々が生涯をおおして、いかに生きられたのか、いかに交わつてきたのか、生前の日々を思い起こします。

この永眠者記念の源流をさかのぼっていきたいと思います。永眠者記念は日本基督教団の暦ですが、もとはローマ・カトリック教会の二つの典礼暦に由来しているようです。まず、11月1日が諸聖人の日と定められています。これは、4世紀にキリスト教が迫害により殉教した人たちを、聖霊降臨日の翌主日に記念していたことにさかのぼります。もう一つは11月2日死者の日です。こちらは998年フランスのクリュニーの修道院で11月2日にすべての信者の死者を記念していたことにはじまります。

二つの祝祭のうち諸聖人の日が殉教者を記念するものですから、厳かな思いをもちます。殉教と聞けば、純粹で実直な信仰をイメージしがちですが、歴史家によれば実際は、相当複雑だったようです。ローマ帝国がキリスト教に大迫害を行ったのは、ディオクレティアヌス皇帝による303年のことですが、度重なる迫害の政策は、それぞれに違いますが、主なものは、個人の棄教をつながすものです。政策としては、礼拝集会の禁止、教会の破壊、聖書を没収、焼き捨てる、司祭の逮捕などでした。キリスト教徒は地下墓地に殉教者を葬

り信仰を守つたようです。

告発され迫害から逃れるためには、ふたつの方法しかありません。棄教するか地下に隠れるか、です。それにしても、このような度重なる迫害においてもキリスト教が衰退するどころか信者が増えていったのか、いったいどう説明したらよいのでしょうか。なんと最後の迫害から10年後には、キリスト教がローマ帝国の国教になるのです。

(紀元40年には1000人程度であったと推定されるキリスト教徒は)公認された313年ころには、スタークによれば、ギリシア・ローマ世界の全人口の17%にまで達していました。そして、国教化される直前の4世紀の後半には過半数を超えたのです。しかも、250CEからの100年間に、人口の2%から過半数へと飛躍的に伸びたと言つのです。(当時のローマ帝国の推定人口は約6000万人。従つて、キリスト教は最初の350年で6000万人以上の信者を獲得したことになる。)その理由についてスタークは、歴史資料にあたり、社会的分析を加えながら、幾つかの仮説を展開しています。その中で印象に残つたのは3点です。第1は、病人や貧窮者にキリスト教徒が示した献身的なケアの姿勢。第2は、そうした貧しい人々がたとえ本意な死を遂げたとしても、丁寧に葬り、また短すぎる人生によつてもその命の尊厳はいささかも減ることなく、かえつて神のみもとで大切にされ、永遠の命を得るといふ、死後の安寧。第3は、初代キリスト教における女性の地位の高さです。一部の都市国家の上流階級を除いて、一般的に低かつた女性の地位に対して、初期のキリスト教会では女性が指導者に選ばれるなど女性の地位

は高く、困窮する女性への支援が組織的になされていくことで、ギリシア・ローマの女性たちはキリスト教に大きな魅力を感じ入信したのです。(志村真：中部学院HP)

そのような、キリスト教徒の態度が、度重なる迫害の合間、2世紀(165〜180年)に疫病がはやつた時に示されました。このとき人々は街を棄てて逃げているのにキリスト教徒は病人に介護を施したようです。死亡率は30%から10%程度に抑えられると推定されます。このような死に向き合い生きる態度が、どこに由来するのかをたずね求めるなら、ひとつは福音書にあります。

マタイ25・34そこで、王は右側にいる人たちに言つ、『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。35お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、36裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』

つまり病のひとに対して、あたかも神に向き合うかのようにと教えるのです。

さらに、死をいかに理解するかという問題が根源にあるのです。パウロは福音書に先駆けてその問題に答えています。すなわち、死は命の終わりではなく、肉体の終わりではないか、と。なぜなら、命には朽ちる命||肉体の命と、朽ちない命||霊の命があるからだと言います。

50 兄弟たち、わたしは言う言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできません、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。51 わたしはあなたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。52 最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。53 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着るようになります。54 この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。「死は勝利にのみ込まれた。55 死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」

朽ちる者として肉体の命だけをいきるならば、死は恐れるべき対象です。しかし朽ちない者として霊の命を生きるならば、死に敗北するのではなく、勝利するのだと、パウロは教え説きます。

パウロのような偉人、教会の創始者だからこそ言えるのでしよう。またそう言えたからこそ人々は彼の教えにこころを開いたのです。しかし、わたしたちの現実においては、たとえ神の真理が解き明かされても、肉体の命への執着を捨て去ることができないままに人生の終わりを迎えるかもしれません。ただ、だれもみな、無慮に生きるよりも思慮深く生きて、自分に納得していきたいと願っていることだけは確かでしょう。

ならば、朽ちる身体の命にこだわり続けて生涯を貫くという問題を見極めておく必要があるではないでしょうか。(：過去に紹介した話です…)ユタヤ教の寓話に聞きましょう。

義人のひとりが死後の世界に行きました。ある食堂に案内されました。そこでは多くの人たちがテーブルの周りに座っていました。たぐさんの食事がテーブルに並べられていましたが、人々は痩せ衰え、餓死寸前でした。だれもが3杯のスプーンをもっていましたが、当然自分の口に入れることができません。向こう側の人の口に入れてあげればよいのですが、そうするくらいなら餓死した方がましだと考えていました。次ぎに義人は別の部屋に案内されました。そこでもたぐさんの食べ物を用意されていました。彼らはみな、ふくよかで楽しそうに談笑していました。だれもがみな他の人に食べさせていました。天使が義人に言いました。ここが天国です。先にあなたが案内された部屋が地獄でした。

56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。57 わたしたちの主イエス・キリストによつてわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。58 わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずですよ。

寓話が教えるところは、先ほどのマタイによる福音書の教えおなじです。とこのつまり隣人への愛をいかに実践す

るかという問題なのです。信仰によつて、死を超越して神の国を受け継ぐのではなく、隣人を愛する先に神の国を受け継ぐべく道が備えられているのです。